

令和4（2022）年度 第2学期始業式 式辞

駒場東邦生諸君、おはようございます。

第7波は大方の予想通り大変な規模となり、それが収まりきらないうちに2学期の始業式を迎えることとなりました。感染者数において日本が世界で最も多くなったというニュースには、やはりショックを受けましたが、それでも動きを止めないという社会全体の方針や動向については、様々な視点で様々な意見が述べられました。本校としても、もちろん迷いはありました。世の中の動きを見るに、やはり経済優先の考え方がその根本に見え隠れするのが否めない状況にあって、教育のあり方としては別次元でしっかりと議論するべきではないか、世の中の動きにいたずらに迎合するかたちになっていないか、という思いは当然ながら常に抱いていました。しかし、霧ヶ峰および志賀高原林間学校や各クラブの夏合宿を3年ぶりに実施しつつ、夏休み全体の活動を止めることなく行おうという方針を、変えることなく実行しました。この決断は、1学期終業式において述べましたが、学校におけるウィズ・コロナのあり方を、生徒諸君一人ひとりが自分ごととしてとらえること、すなわち、これら宿泊行事等の活動を自らの学びとして自分の人生に位置づけること、日ごろの感染防止のための行動を主体的にしっかり行うこと、について、皆さんの意志に大いに期待したからこそ、下すことができたものです。

果たして、2つの林間学校と実施できた夏合宿においては、ほんのわずか発熱等の体調不良者が出てしまったものの、これらの行事の実施中にコロナ感染が広がったというケースは、一つも出さずに終えることができました。これは、かなりの制限を課してのものでしたから、諸君が期待する成果が十分に得られたものではなかったかもしれませんが。駒東の実施要件は厳しすぎるとの声もいくつも受け取りました。しかし、諸君の主体性に基づく活動中に、感染が広がることのないようにしなければならぬとの立場を最優先に考えたときに、一般の判断基準が緩和される方向であるとは逆行するように見えたかもしれませんが、個人差や様々な条件の違いをカバーするレベルで安全を保つてなおゆとりがあるところに線を引かざるを得なかったのです。この趣旨について、皆さんや保護者の方々からご理解いただいて、とにかく実施に踏み出すことができたことには十分に意義を認めることができると思います。この度の実績をふまえて、では次の段階ではどこまでできるのか、その検討に現実味を持たせることができるからです。

このように述べると、中には何とも言えない虚しさや悔しさを感じる諸君もいることでしょう。林間学校や合宿への参加を断念せざるを得なかった諸君は多くいると思います。また、いくつかのクラブが合宿中止を余儀なくされました。さらに、大会やコンテストへの参加を辞退しなければならなかったクラブも複数ありました。たった一度の機会を逸してしまったことは、悔やんでも悔やみきれない思いを残すものであったかもしれません。しかし、その悔恨の中で思い考えたことを、自分の中でしっかり対象化すれば、実施もしくは参加できた場合に遜色ないほどの学びがそこにあるのです。そして、それは、諸君一人ひとりの次なる学びに結びついて、さらに広がってゆくものなのです。悔恨の只中にある今は、なかなか背うことのできないことかもしれませんが、このことを敢えてここに明示しておきたいと思います。今日は、この後、各部のこの夏の成果を報告する会もあるようですが、その目覚ましい活躍の背景に相応の工夫や努力があったからこそ、それを讃えることができるわけです。その意味では、思い描いた通りの成果を得られなかった諸君も、それを正面から見据えて、次につなげる努力への意志をもつのであれば、同様に讃えられるべきであると考えます。

先ほどから、「次」という言葉を意識して使っているのですが、これはもちろん、今年の文化祭のテーマ「Next」を念頭に置いてのことです。今年文化祭は、3年ぶりに本来の日程での実施を考えています。2学期が始まれば、文化祭に向けて一気にボルテージを上げていく、駒東ならではのカレンダーが復活します。入場者数やその他についての緩和の方向や規模は、従来の本校文化祭のあり方と比べて、まだまだ十分であるとは言えないかもしれませんが、まさに次が見えなかったコロナ禍を過ごしてきた我々にとって、次へつながるステップとして、意義深いものとなることは確かです。諸君の主体的な取り組みの中から、有機的な提案がどんどん出てくることを期待しています。

さて、話題は変わりますが、夏休み前の終業式で私は、夏は祈りの季節であると申しました。原爆の日や終戦の日を中心に、今年も様々な言説が取り交わされましたが、皆さんはそれらをどのような思いで聞いたのでしょうか。今年も終戦後77年に当たるわけですが、明治維新から終戦の年までの期間もちょうど77年であり、その同じ77年の歩みの類似性を語りつつ、その中に今般のウクライナの戦争を位置づけて論じているものも多く見られました。また、先日の、核拡散防止再検討会議において最終文書が採択されず、決裂したまま閉会したというニュースは、大きな衝撃とともに報じられ、唯一の戦争被爆国としての日本の振舞いについても様々に論じられました。そして、やはりこれも、今般のウクライナの戦況に応じて、私たちにかつてないリアリティをもって聞こえてきているように感じます。日本の77年前に終焉を迎えた戦争と、いまウクライナで起きていることを、並べて論じることが多いのは、いろいろなことを示唆しているように思うのですが、私は特に「語る」ということについて考えさせられました。ある日の新聞のオピニオン記事に、20世紀のメディアにおける可視化技術の発達、攻撃する側とされる側との差を絶対的なものにして、残虐な無差別攻撃を可能としたが、現今のメディアのあり方によって、その非対称性は崩壊し、攻撃されている側の市民はただ見られているだけではなく、彼らが見ている風景を、そして彼らが語る言葉を、世界に伝えることができている、という指摘がなされていましたが、これにはなるほどと思いました。イラクの戦争までは、市民目線の情報は世界に届けられていなかったが、ウクライナの市民からは、その眼差しや語りが届けられていると言うのです。翻って考えるに、77年前の日本の戦争は、今どのように語られているのでしょうか。5年ほど前には、自らの戦争体験を頑なに語らずに生きてきた人たちが、今伝えなければその機会が永遠に失われるとの思いから、重い口を開き始めたということが目立って伝えられていたように記憶しているのですが、今年の報道を見るに、それらの語り部は、やはり急激に減ってきているように感じました。その代わり、戦争を経験していない世代がその語りを受け継ぐ試みについて紹介しているケースが増したように思います。メディアの発達によって、距離的な断絶を超えた語りが可能になるのに対して、時間的な断絶はどのように克服されていくのか、続けて考えていきたいと思っています。

最後に、高校3年生諸君へメッセージを届けたいと思います。

夏休みは天王山であると言われるようですが、高い目標を見据えて頑張っている諸君は、長い夏休みを前にしてやるべきことをあれこれと思い描いていたことと思います。自らに課した課題は、どの程度消化できましたか。うまくこなすことができた実感している諸君は、それを自信にして進んでいってよいと思うのですが、思い描いていたことと現実とのギャップを感じ、焦りを募らせている諸君も少なくないと思います。そんな諸君に申しあげたい。受験勉強は目標がはっきりしているだけに、その進捗や達成度が殊更意識されるのですが、元来学ぶことにゴールはなく、それは受験勉強においても同じなのです。さらに言うなら、学べば学ぶだけ、先行きが拓けるわけですから、学ぶべきことも増えていくのです。つまり、理想の進捗とのギャップを感じて焦っているということは、その分やるべきことをやっているという証左なのです。皆さんは、自分で自分の学びをプロデュースしながら、それぞれの目標に向かって努力を重ねているわけですが、その意味で、いよいよ皆さんの駒東生活は佳境を迎えます。受験勉強に無味乾燥な印象が伴うことは否定できませんが、実際は、中身の濃い、充実した期間になっていきます。これまで様々な場面で切磋琢磨してきた学友たちとともに、思う存分、伸び伸びと学んでほしいと思います。

以上をもって、式辞といたします。

令和4(2022)年 9月1日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦